里見八犬傳拾二編 卷二十

13
3416
68

13
3416
63

拾二編之内

松野勝若院

南總里見八犬傳第九輯巻之二十

東都　曲亭主人編次

第百二十回　犬士露宿して追隊を迎ふ　老僧袱を褰て寃罰を示す

却説犬塚信乃戍孝は鄕閭を憶ぜ碧堂を辭して地藏菩薩の奇異利益顯はなる米の來歴を照文筆に大代四郎親兵衛の漏れを尋ぬ四六城の舊僕生來仆ぶ横死の事及德用と虜ふをる彼の事の終末を詳に盡す程に照文が若黨紀二六も庫裏の邊に在りしが一五一十を洩さず俱に感嘆をさらけ當下信乃は紀二六に吩咐て鄕閭の騷兵某甲に預げる米を囊の侭食寄せ件の人々に皆奇に敬驚て妙と稱へく佛法无量廣大の利益を仰ぎ奉るけり。扨ぞ中に大法師は恭しく身を起して左右に方に向て合掌して地藏菩薩を伏拜むと數回念果て坐に復りて却信乃に生ぶ寺に拙僧

素より菲薄ゐて念佛の外所作なけれど君侯御父子の御盛德と和殿達八犬士の孝義賢才ゐ因縁あれば世人今涓滴ゐ及ぶべからず非情の石像灵異あり今日の大尼を救ふ玉ひ利益眼前疑ひなし又風雲の天助の如ゐ伏姫神の擁護なゐ敦神の冥助ゐ烈しくて佛の利益ゐ促迫なゐ是神佛の異なる所以賞罰その差あゐ似るも悪を懲して善ゐ與なる天理の外いあるべからず寔ゐ況くや幸なるかと感嘆ゐ他事なくして信乃いはゆる餘の七犬士も我们なるべ然らんやとて俱ゐ謙遜なりけり姑且て信乃ゐ毛野ゐ問ふて曰く這米ゐ才ゐ二舛あまりあり今ゐ我一路見ゐ庵主蛺雪蜜崎主僕暇兵と俱ゐ二十名是ゐ我们八名を加れば都て二十八名の食料なれば粥ゐ炊ぎ一碗を各啜ゐ足ざるべ那白屋ゐ鍋いるかと問へば毛野ゐ頭を掉て曰那里ゐ黄子ゐ布なる敗袋一枚あるのみ鍋釜などあらざりと答を道節うち听て曰く和殿们も知るべし其米と囊の俵ゐ水ゐ浸し壤ゐ埋めて上ゐ柴ゐ焼たい蒸れて熟て飯ゐ做るべ なる野陣なる鍋なれば折戰飯を炊ぐ者の必ずなる事なれども人のヨメ

沉ゐ米寡沉ゐ粥より外ゐ せざるべとは莊犬黙頭て現ゐの米ゐ足ざれば一握宛とても一宵の饑を凌ぐ せんそも塩なくてゐ不便ゐ ことを毛野ゐ云へて曰く塩ゐあり塩ゐ有り咱们方僅這庫裏の背なる白屋の邊を檢ゐ折其頭ゐ在なる石地藏ゐ人の供なる塩三土器あり又その前面なる大竹藪ゐヨメく筍児の生くるを沉筍児ゐ自生の侭ゐ拔ぎ一く梢を伐垂然而竹の枝をりく根ゐ ちよりく節を串ゐて上より將酉油を沃ぎ入れその四下の土を空て何まれ新ゐく焼たいその筍児蒸熟して味ひ烹ゐ勝れども如此まれいその明年其頭ゐ筍児生ることなる宜ゐ好事の驕饌なれば其ゐ做んとゐ ゆるれども苔なる筍児を穿採て开も壤蒸ゐ做なるべ飯の足ざると補ふべ合米ゐ妙なるべとゐ大家拯びて毛野が萬事ゐ脫落なく任なる折ゐもるとの逆早なりと誉けり徒而信乃ゐ紀二六ゐ徒々とあるを沉て件の米と遽與んとなるゐ囊ゐ原是石地藏の頭巾なれば二舛の米と容るとも二舛の飯い蒸くて何を欲得そ求るゐ人の頭陀囊の白布單ゐ製れるあり是なるとそ笈を啓て出るとそれゐ現四五

丼の飯を容るべ。登時信乃は又紀二六が二人を采は甲乙両箇の嚢に分ち納て水に浸し。そぐ
俄沙く土中に埋て柴を焼べ飯に做るべし。又嚮に汝もろもろ竹叢に生出る筍児を
ヨヲく拔採て皮を剥祛ぎて梢を伐棄根まぐ節を串刺て石地蔵に供る塩を佛に乞
禀て筍児の節の内へ塩を班るく好搗へそ壊蒸ふ〜く皮を剥ぎと教諭せば照文
も詞を添く。爰に紀二六の美い要る紀奴隷毎に偽せて安せ面給へ。そ世紀二六を
ちろ〜果て嚢の米と頭陀嚢さへ受合りつ引提て躯く外面へ退のけり。その日は四月十六日
ゆて。日の最長く最中なれば朝のほと忘るべきの時までもまぐ暮果ねば。犬士は那邯鄲の客
舎に憩ひ盧生にあぐれば件の飯の蒸るまぐ。假寐の枕を求ぎ大家親兵衛を珍客まで
、大照文代四郎も俱に草裀に囲坐しく。閑談數刻に及びる。當下小文吾は親兵衛をうち高
ひて。喃仁汝が富山に出世して。老侯に見参の始より。素藤を征伐の支の趣又いまる日両
国河原にく。蜑崎生に相別れて素藤と再征の為水行を上總の館山へ赴く折のほとは。

蜑崎生も姥雪も。對面の折に聞かど。亦後のるいまぐ知ぎ那折上總へ伴ひ。と宜へる。
那三個の一路児とそのその地に俱しく来ざると。問べば又荘人も。ぞつる隨に親兵衛と。次園太
郷三孝嗣の奇耦を只顧感しく已まぎ又毛野と道郎は孝嗣が館山にて。軍功の有や無
や。那身の安危をいかと。問へば。信乃現八大角も又、大照文代四郎も。齊一脉を找めいらふく。
と。問れる親兵衛憶ぎ歎息して。筆て茲に鮮に素藤伏誅の支の光景及妙椿と
富山に牝狸とそ。孝嗣並に次園太郷三も。戰功いまるく。八犬士に先ちて。館に
仕ちらんを欲ぎ。又親兵衛に従て。結城へ来る路の程。今日諸川の這方に。親兵衛は
憶るく。一個の法師に喚留られて、大庵主の尼難と。詳に告られしかば。路次といそぐ。
左右川の上に。緝捕の頭人長城惣利の馬の尻を撻走しく。人馬を急端に滾に落し。
敵の駐兵と拘ぎて、大代四郎照文主僕の急難を救に折後れて来る孝嗣次園太郷
三も共伯に那里の圮橋を渡る程前面の藪蔭に敵の伏兵あるを放ぎ鐵砲に件の三人は駁ち

落されて急湍の為に流れや亡け骸も住めぞ做りかと天助風塵の奇特ふよりそ勍敵或い
同士數〻川ふ顛陷く、大代四郎照文主僕と拯ひよう〻偵そと告知らく又いまう那折風
霾の天助とかりふ必是伏姫神の霊験擁護るべふ里見ふ舊縁なければとく狡忠孝義
俠ヨヨく泣く我三個の一路児と看歎ふあのける神慮い料りかねれども鄙語ふいるとあり欒い
死ざる病人を治し神い高運の九夫〻衛る然い孝嗣次圀太郷三ぶ果敢なく川へ數も陷さと
表俱ふ命數盡てるるくむ左も右もいと惜しけれ示娛〻具ふ解示せい、大照文代四郎も
那折のるとふ出て人各幸不幸の同じらぬと歎けり今これを听く毛野道節荘介小文吾
信乃現八大角も皆胸と浅し乞孰ら浩歎せざる死惜むふあまる孝嗣次圀太郷三行ぶ一期の
為命先縁虚かるぎして偶ふの地ふ来まけるふ再會の本意画餅ふ做りい造化の小児ふ失
策るぎとふざること泣ざるべし果せるかると皆共侶ふ送恨ふ方ふるけるそぶ中ふ道節い憶ば
聲を励して今番孝嗣们三友の横死い悔て復らぬ歎ふれども犬江ぶ那折ふ冤家の頭

人長城惴利とやらンと討捕ふ慰るよふぶ馬ふその馬と撻走らぬ川へ没るのるべ
开い亦仁の過るん當の敵ふあるぞとも皆同悪の奴们ふれい生口毎の首數を陸して這憤
怒ど洩さまん何をもて孝嗣们三個の亡魂と祭んやと性起るとも毛野い推禁めくそるべと易
紀事ふれども今陸らくと思惟るふ那風霾の天助妙応又犬江ふ中途ぞ、大庵王の急難と
忠告まつとふ法師のふ又石地蔵の奇異利益都て躬方ふ福あり甲も乙も總括めて伏
姫神の神呼ぶ言ん开を何ぞと推てもてふ神灵い是形貌ふ物ふ託るとふい形貌ふ亦
らぶ那忠告の路上法師も亦路傍矮堂ふる石地蔵も皆是我姫神の神呼為ふぞあらんぞ
らむ偵る妙応あるぶ里見の家臣ふぞとて忠孝の後生義俠の老人を死殺しふ做しぬい
んや那命數の竭さると竭ざるとい誰ら知るべ死非如那三個の知音们が敵の鐵砲ふ斃れら
とも窮所ふあるぞの死ぞべらぶ又急流ふ陷らとも水戯ふ熟て好泅ぶ命を免るともあらんい
まぞ屍骸を検ぜぞして惴利ら如同悪の生口毎と殺さんるい短慮ふそと諫れい荘介小文

吾もその議を好して現犬阪の意見のごく結城の城より追隊の士卒が今ゆもれ索れ安来
内ふ惴利も俱せられ縦惴利いまぞもあれ真の追隊がうち向ひ自他の邪正を解諦あり惴
利を乞て怨を雪ん言聴れぞいその折ふ生口毎の首級を落して追隊を破りて安房へ帰
ん幷に已とをゐざる義とのべ大角も亦ふ遠く唐山の礼を按まるふ君父の讐ゆ與共ふ
天を戴ぬ兄弟の讐ゆ兵を復さぬ朋友の讐ゆ邦を同うせじとへるそも亦時宜ふ依るべ
のことと諭せば、大も亦ふ約莫這回の会佛供養ふ先君並ふ列将士卒の追薦の為る
ふ精舎ふ阿脩羅の街衢ふ変りて殆危窮ふ陥ひ方三所の闘戰ふ一個も
敵を殺さぬ他們が同士殺まるのみ徒て拙僧本来の志願ふ稱ふと按ひ思ふ今一
朝の怨ふよりて殺伐の義を行れるべその理ゆとも慨しけれゆの義を兼容あれと陪話まび親
兵衛信乃現八照文も代四郎も、大の意表を思ひ返て俱ふ詞を磐も程ふ道即遂ふ思ひ
かへて打ち微笑て答るゆ各意見を殷ふ現我為ふ良策ふ那孝嗣ふ咱們ゆ犬阪犬

江の知音ふ又次圓太ふ大田大川と舊豆父左衛ふ這二三子の意見を為ふ我
一個殺伐の義を旨とあるふ傷若亡人ふ似れども非理暴戻る仇の為ふ益友三名と亡
れる。憤の為方るさふ漫るける劇談ふ傷痛く思れけ。より死とうち解て又餘談ふ
及ぶ程ふ紀二六を蒸る飯と筍児と菅笠ふ載せ奴隷ふ持て来て犬士と照文ふ報るゆ
仰ふ儘て米と筍児と壌蒸ふ仕りけ。ふ是腐せ米ふ奇くも一倍殖て両ん囲の嚢ふ
満ふ入ふ徒て上下二十八人の夕餐ふ餘りあるべ。やるべうりやとき出を大家ふて奇ふ驚
く。是も亦伏姫神の真助るる秋とぞろふ敢亦ヨ辯せば飯ふ各腰ふ吊る水飲の椀あれば
出てるるふ壮衣ふけるぞ筍児ふ蒸ふ後ふ皮を去て切るゆ紀二六ゆ准備ふける稻の廣葉ふ
うち載く人別ふ薦めけり登時信乃ふ古歌を思ひ出く家るゆ筍ふ盛るものと草枕とうち
誦れば大角躰て下と續て旅ふ行れば椎の葉ふ入ふけ。徒だるのゆ折ふ觸てさまぶふ
臭ふ行ふあるべ。然ば世の常言ふいへるごく飢る折ふ東西皆美味ゆ各腹ふ充満あるべ

その餘は夥兵伴當們にぞ紀二六に遞與させて他們も都て漏るゝ者なく飽までに食すべしに。猶翌の早餉に做させて餘飯あらせよとて疏食を喫ひ水を飲み肱を枉て枕として今宵をあかに明しぬるも亦是君子なるべしといふ毛野が秀句に興あれば大家笑局に入りふけり左右する程に日の暮しかば照文は八犬士と商量して夥兵と紀二六們に課して莎庭に篝火を燒せるに手分朽たる散木と老樹の枯枝多かれば通宵薪に匱しからず八犬士照文們は結城より蒐る追隊を等らて暁ちかしに這里に憩ひしも人知ざる狹小夜深るまで外面に推寄來ぬる敵なければ稍を合し膝を抱えて一霎時疲労を補ふ程に夏の夜いと短くて那方に鳴てやらん杜鵑横雲の隙に聲のみして鴉は茂林を離れても城より追隊はなきぞ蒐らねば昨夕殘れる飯あれば又稍兒を壊蒸にて大家早飯を果して犬士們は猶不娯しきに城へ使を遣して那里の答を听くべきか欲然せん間諜児をもて城の動静を探ん欲とて商議に時を移さしかば已の左側にありける浩処に這廢院の三門を只管に敲く者あり紀二六なく聲をかけて來ぬるは誰やと向ふに當下敲く者答て云う是は

結城殿同宗の老黨なる小山大夫次郎朝重と喚做す者の念佛供養の紀者は大庵主と与らし並に那法莚に來會の人々も昨日事ありしよりこの処に止宿のよしを傳聞て知りぬ。事の仔細を尋問ん且君命を傳ん為に馬を飛して來ぬるなり三門をひらき對面せられよとぞ喚りける照文の夥兵伴當們はこれを聞て目を注して素破敵ぞ寄せたると昨宵準備に竹藪なる竹を伐て火に炙り各手製の竹槍を挾み身を構て防ぎ戰はんと欲するを紀二六制め退けて其かくと庫裏に走りゆきて八犬士照文們に件のよしを注進す。然ども犬士は毫も譟がず速に對面せんは怯れありと思はれん箇樣々々にすべければぞ大照文代四郎も示しつゝ倶に立出けり。其が中に信乃と親兵衛は三門の邊に赴き餘の六犬士は庫裏を距ること二十間許なる苔生たる秋尾石の中程に在り。その後方なる大法師の左右に從ふ照文と代四郎在り。又照文の伴當夥兵們は竹槍を携て列を整て六犬士の左右に侍り紀二六は信乃親兵衛に從ひて又三門へ赴きつ生口毎は那這なる樹の下に斃れ

八犬士を逐く
朝重
結城より到る

たりその為体武備儼然士卒二十名ほど足ぶれども數萬騎笹竜ある城郭に劣るまじくぞ
ありける。當下信乃と親兵衛とが俱に三門の裡面に在り隨即紀二六をもて答る曰小山殿に
あらせられ。知るべし如くその処に大庵主八犬士並に蜑崎十一郎照文妹雪代四郎與
保們主僕甲乙二十八名昨日より止宿あり。来命を受て久しく固守のあり使ひいで三門を
うち開くに入れまゐらせる該ども。いふせん這門酷く傾くこれが開くべもいかぞ我們這里へ
立寄りて折角門の敗れる処より入りぬ。その義を亮査あれとぞ聲爽やかに委しく答る。朝
重具ぶうち聞くに又伴若黨とりく答るまゐらせる趣ありるに但當國守の使なるぞ角門
より入られるぞ。開君命を辱しぶ似く面正しくもるぞ所以今この寺院に在宿せるぞ。八犬士と
やらんぞ。ヨワカの少年これもと狹風聲ぶうりて粗知れり。倘その言実なるぞ這三門の傾くた
はをを推正しく開れんや。その義ちく及ばず角門より出迎て。對面せるやと喚るを。親兵
衛ぞ。勃然として。みづから意ぶ答るまゐらせる趣その意とるに八犬士のヨワカなる。獨

その少年のまゐらんや。昔の義秀親衛ぶ十二倍なるぞ。就中犬田小文五ぞ是裏ぶ越
路ぶ旅宿の折暴れる牛と隻ぶ駐めく面色変らぞ自若なり。然ば這傾くる三門を
推正しく開んぞいと易ぶべけれども。小山殿の為ぶ門卒ぶ倣るぶ似て面正しくるぞ
所以所以所詮角門より入りぬと。目今這門を推倒して廣ぶ客を迎入壓ぶる撲
をもひそと鮮誇りて。三門の柱へ寄るを。撲て推せば忽地揺々と揺動ち尾墜碎けて覆るべ
く見えしに。朝重驚ぶ聲高ぶ曰ぶ非如無住の廢院なりとも我身一代間の
所以をりく這三門を破却せられば後世の罪障免れがたけん我謬ぬ卒然ぶ角門より入ぞ
けれと勸鮮ぶ親兵衛冷笑ひく卒とそ信乃と共伯ぶ大士の隊ぶ退けり登時紀二六
るるく三門の傍る件の小門を開く程ぶ朝重馬より下立てヨワカぶ黒兵伴當と皆門外ぶ
留置く絶ぶ両個の伴若黨と東西持る奴隷二名と鞋奴とのみ従て角門より入来るを
とこれが年齢い五十許ぶてその骨相タくぞ身ぶ漂縫綿の夾衣ぶ唐織の戰外套を披

文溪堂藏

下ゐ青葱純子ゐ黒紀下間道ある野袴穿て白柄ゐ螺鈿鞘の両刀を腰ゐ帯さる汗衫の上ゐ黒紋早織の身甲ゐ着網鎧ゐ銀の鋲打る辟胸縛袖の端より顕れる又八犬士照文代四郎ハ昨日の仮ゐる彩壮衣ゐ着野袴の織色両刀の表装も各同じくねども皆千金の鋭刀を帯る人も咸千金ゐ打扮と今あゐ小山朝重ゐ方れば二の町ゐ似て二の町を〻骨相都て弥優て適一人当千の勇士ゐ〻ものとゐるハあらじ曩ゐ甲斐の指月院を才ゐ信乃と道節が武田信昌王ゐ見参の折ゐも看官誉ざるハるゐ〻ゐの日を八士具足〻く且従類もヨフ〻を〻ハ英気先度ゐ十倍〻ゐと晴ゐる對面ゐ然ば躬方の野兵伴當们ハ思ゐも似ざ結城より来ぬるハ討隊の軍兵ゐらざ只平和の使者ゐれば幸ゐかゐ。と含笑て言の仔細を听まく欲ゐ各耳を傾けゐ。却説小山朝重ハ樹下ゐ輟ゐれゐ。躬方の僧俗を尻目ゐかけて髢石の中央を徐々と来ゐる程ゐ、大法師ハ照文と代四郎を左右ゐ〻く。找ゐ出立迎ゐ且法名を告て對面ゐ〻来意什麼と尋れば朝重答て某ハ結城同宗の老嚴ゐ小山大夫次郎朝重是ゐ君命ゐ〻ゐ。各ゐ尋問ふ〻ゐ一義ゐり那犬士とゐ〻ゐ。ゐ〻ゐる八個の施主も在宿ゐらむ迭ゐ坐て談ぜべ〻とのゐ〻く後方を〻ゐ〻れば伴の奴隷ゐ〻ゐ〻ゐ携ゐる草席十枚ゐ〻ゐ〻ゐ東西程ゐく布並れば犬士も亦找ゐ出て朝重ゐ對面ゐ這廢院ゐ庫裏あれども朽敗れて〻ゐ〻ゐ如く白屋ハゐと陜くて舊ゐる隨ゐ荒ゐれば膝を容ゐる処ゐ主客ゐ席ゐ准備届ゐ朝重の脱落ゐれゐ人々都て感じけゐ。恁而主客揖讓して俱ゐ程ゐく坐を占ば朝重、大ゐゐ向ゐて只今尋問ゐとのゐ〻ハ則是別義ゐあ〻ば和僧ハ嘉吉の役ゐ躬方戦殁の菩提の為ゐ〻。結城の古戦場ゐ庵を締ひ〻。昨日結願供艱の折十個の法師来會ゐ〻ゐ法筵を相資け且施主ゐ〻ゐて貧民乞児を賑ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻と問ゐを〻ゐ〻ゐ然〻ゐ那先亡の菩提を弔ひハ我舊君里見殿の先考季基王法歸義烈院殿を首ゐて故當國守氏朝主並ゐ列将士卒の為ゐ宿願昨日成就ゐれば敢他の施主の帮助を討ざ〻ゐ〻ゐの弐安房へ〻ゐ〻ゐ。情地ゐ遣されゐ代香使這蛮崎照文ゐ齎ゐ布施の金

子の。松僧素より寡欲なく。総る東西を欲せざれべとの。時照文語を紹て。某大士と相計て。
殘さを施約ふ牽ぬ。昨日法筵を資けく。十個の法師は其舊識なり。
ねど招じて来會せれ。且石塔婆を一夜の間ふ造り出されー。奇工あり。其長老は能化院の星
額。と呼るのこ寺は那里ふあるやら。開ゐ漏ーいひ。ふ昨日城内より。緝捕の士卒うち
向ふと呼えー。折那長老は徒弟と共侶ふ。寄隊と和解んとそ。開ゐ途へ出迎へーとその隊ゑ
頭人長城生が。捕捕りゆ。と呼るのこと。告ると朝重うち。何ゆ故ふ
當家の士卒と。逆正寺の法師們をヨヌく虜ふせられーやと。問へ道節毛野莊介現八小文吾大
角ハ。經稜素頼惣利ゑ。德用を。帮助る。詐偽の緝捕の。両所の茂林の戰ひを。箇様〻〻と
解示ーそ。我們は始より人と。爭ふ心ゑー。遊莫殘忍奸虐る。悪僧俗們は。失れん命惜ーち。ふ已
上と。ゆ。他們を虜ふ。ゆられ。敵一人も敢殺ざ。あの地を遠く立去ざりーハ。國守の處分ふ依ん
とて。その義を。查ーぬ。と。異口同様ふ。朔れ。信乃ハ。亦德用を。俘囚ふ。為体及。略傷

殺堂る。石地藏の。利益奇特の。崖畧を。倦々る。と。告るゆを。親兵衛は七大士ふ。後れて。昨日
這地ふ來ける。左右川の邊を。、大代四郎照文主僕の危窮を。救ひ。當日の。及一路。児孝
嗣們。三人は那川の。圮橋を。惣利ゑ。伏兵の。鐵砲ふ。殺れ。水ふ陷て。殿も。住めざ。ーる。その。折風
霾を。一夫の。祐を。惣利ゑ。隊兵們は。或は。同士殺ー。或は。水中へ。滾陷て。死活は。知らで。做ーる。
詳ふ。陳示ーて。又ゆ。我一路。児孝嗣。次園太郎。三は。莫逆知音の。浪友を。忠孝義侠
傳。平之介。ふ。寃家惣利を。殺ゑ。漏ーうけれ。後恨。今ゆ。ゆる。方る。那惣利を。鮮死ふ。
ふく。怨を。雪ん。為ふ。姑且這里ふ。露宿を。國守の。處分を。ゆ。いと。といへ。道郎。聲高ゆ。
我們既ふ。商議を。那惣利們ゑ。罪を。糾ーて。我們ふ。遞與ー。賜り。且星額長老師弟を。放
ちくその。寺ふ。かへ。されゑ。生拘る。經稜素頼德用。堅削們を。返ーちゆ。せ。然らぬ。今面前ふ。生
口毎の。首。殺る。落ーく。怨を。雪ん。ゆふ。ぞ。と。惣るを。信乃ハ。推禁め。朝重うち。向ひて。今。親兵衛
がらーどく。殺ーそ。克ゆ。敵る。を。殺さ。ぢ。ーい。豫より。、大庵主の。教諭。あれ。先亡。菩提の

本意なくて殺伐を宗とせざ然れども仁義ふあら成れざるを動さざる我れ〻が本性都く
かくの如く人ふとそ三個の友と奸悪人ふ亡れて猶是をも心ぶべくい亦何事をか忍ざる為
言聴れるべ辛ひるゝんと緩急各理を盡して残る所いなるゝと朝重熟所果て感を感と
大々こるゝを為ふ貌を改め悄然として答るゝ。家ふ暴戻の臣あれば是則主君の恥と今番
経稜素頼惣利们並逸疋寺の住持徳用が非理非法の挙動い故あり昨日より當
城内ふ岑えゝば。某則君命ふよる各の足跡を迂蹇して越ふ對面を沼るかい支の合否を
知まく欲くて胡意来路と問試ふ豫我ゝ趣と異るゝを抑里見殿の先君季基朝
臣い我先君故判官朝と同義烈い良将ゆ。変も亦浅らゝを俱ふ嘉吉の役ふ戰歿の後
年と経て當家再興の喜びありといども乱れる世い舟車届らで好を安房ふ結ふ由るく
遠くもあらぬ鈴藩屏るゝ胡越のごく疎濶るゝふ這回、大庵の念佛供類い嘉吉ふ戰
死の列将士卒の追薦の與ふして且舊交を忘られざゝ自他平等の心操を成朝始より

岑知べ法會を資くべゝふ庵主いゝ諸君子も名利を斃い心のく告られざるを。是
非ふ及ぶを小るふ逸疋寺の住持徳用當家の驕臣経稜素頼惣利们敢あの弑逆
思ふとるく妬忌の邪念を挾まて城より向ひ緝捕使と詐り猛可ふヨヲ勢を駈催しく庵
主並ふ来會の諸君子と推捕へんと欲せゝふ友て他们い生擒られて恥を當城ふ貽すふ至
る。言語同断の僻事あれば縦諸君子の愁訴をくとも允されざゝ罪人ゝそ中ふ長城枕
之介惣利い乱妨の折大江主ふ馬を捷れて人馬共侶左右川へ陷られども流ゝを川下より
岸ふ登りく其頭ふ相識る村の長剛九郎と喚做ふ者の家ふ立寄く水ふ弱ゝ馬を
勦らを濡れる衣裳を火ふ炙らせく敗軍のゝを告ゝべ剛九郎い推驚と倡く盃洗
薦る程ふ主客共侶ふ乱醉あく口角を泡ぶゝ果い惣利怵ぎゝて刀を援て斫んとせ
ふ醉くる者の癖るれば鈍や刀と柢捉られて反く剛九郎ふ首と斃ふ落され剛九郎も亦
國守の家臣と斫殺ゝを後悔く免れゝて。と思ひけん即坐ふ自殺をうけ是ふより近

げんよ
ごろう
ごろう九郎
武蔵国住人
剛力
酒乱
醜男
九郎坊
砂かけ
らんとき

隣の荘客們驚訝て時を移さず城内へ告訴なく件のよしを禀す折から経稜素頼
が列卒伴当及喘利の嘍兵ゆも逃て城内へかへりしも多くありて随即其者毎の許によ
りて件の僧俗の僻事なるを和殿們の武勇風霆の奇瑰経稜素頼は徳用們が生
拘られる事までもその崖略を少知りしかバ猶も默然なく鞫問をそいよくその実を知る有恁
なりし程に逸疋寺の先住未得老僧轎子を飛して城内へ参上りて仏の利益冥罰を箇
様々々と愬る是によりて那怪風は庵主並に諸君子の為に天助の奇特を知られ皆是兄
人なるが故にぞ王君成朝感心の有餘各位を赶蒐て宜しく謝せよと命せられる来意は
都てかくの如し件の経稜素頼喘利は常に鷹鳥を放ち田圃を損ひ驕放なる少ゑるのみ
らねども他們が親は忠義の老黨にて嘉吉に戦死の誉ある又逸疋寺の徳用も出家
人に相応しからぬ男力ゆゑ武芸を好むと折々人の噂にて成朝これを知るといへども他は当
家再興の日京都の管領に内縁ありて執成禀まし功あれバ甲乙倶に用捨せられてさせる

咎はなかりしを他們は思はず大くなる僻事をしいだしたり然どもなれ幸ひに同士戦をなさしめ
のみにて各位の伴当とゞぶ害をうるに至らず更に喘利ならびに大江生の一路児を三個まで撃
陥しける冥罰なるむ那身は村長剛九郎に斫殺され因果覿面諸君子今那首級を
撿して其友達の與にしも怨をいはず解あひねとのひて後方をみかへりて伴若党が携た
る袱裹を解披せさせ出まを視れバ首函にて内なる果して喘利が首級を斂めてありければ
、大照文代四郎們及八犬士も照文の伴当嘍兵も駭嘆して天理の当に然あるべきを
感ぜざるはなかりける登時朝重文いふ事の湊合是のみならず前にも各に告たりし未得
老隠居に対面して又那奇特をきゝたりとのひて又伴若党に箇様々々と吩咐れバ若党
ら紹果て門外へ遽しく出にけり。かゝる程に逸疋寺の先住未得老僧は嚮に小山朝重と倶に
来て遠廃院の門前に轎子を歇て在りしに今朝重に招れて轎子を立出て両個の喝
食に扶掖され東西と載たる吊台十荷に十枚の大袱をうち被しと夫役二十名に肩擔

せく。主客の席ふ来ふければ、大法師い立迎く送の口誼果て後八犬士照文代四郎も對面しく請て席を薦れば朝重も亦詞を添く儲の草席ふ坐らせけり當下未得い、大法師と八犬士們ふ告るやう。今番法弟徳用們ぶ非道非理の計較を拙僧毎ゆ知て只顧諷諫の詞を盡しらども他のこころぶ件の非道を資る三個の檀越い囹圄守譜第ゑ重臣見れば千言萬句も聽れざりしとうち歎ていひふ那人々い事の用場ふ庵主の法莚ふ来會ある師弟十個の法師連を根生野の隊ふ捕捕り折我寺血氣の悪衆徒十名ぶ旅月力ふ乗じ肩ふうち載て寺ふでゐて出ぬ。閉龍んとていそぶふ那師弟十個の法師達い路ゆく猛可ふ重くゐく遂ふ堪ずかりければ悪僧毎い壁伏られて反起んとまくまども幾十貫匁あるやうに身を動さと克はば各嘆ぶ苦しみそ人の扶助を求る折ふ其頭を過る里人ぶ怪ふ立ふて覗れば件の悪法師們い各々石地藏を背へ乗せく道路ふ平張伏まく在りしぶ里人いふく訝りく躰てその地藏菩薩を含卸さんとしてけるふ怪しむ。

皆その背へ漆をりく黏ふどく抬れば那身も俱ふ抬げられく毫も離れざるを必神佛の祟ゐるかと怕れる里人寺へまゐりまく。支の趣を告しぶ拙僧驚ぶ且訝ふ時を移さぬ輪子ふうち駕りつ舁走しく其里ふ迫りく檢しふ現虚談あるべきけり悪僧十個の戯悔ふりく事詳ふ知るべしぶ伴當と寺へ遣しく猛可ふ十荷の吊墓を門前ある莊客們ふ舁しむ。十們の衆徒を十躰の石地藏と俱ふ吊臺ふうち載せそ躰く城内へ舁てまゐりく。年来師檀の好ある小山主ふ直訴ふけるふ小山主驚ぶく這里も亦怎る情由を長城惣利ぶ横死の訴あり且經稜素頼惣利ぶ伴當殿兵們の自想招ゆく。自他の邪正分明れば火佛の祟り疑ふべしぶ。今、大とその母と赶蒐て謝せとある館の御諚を承奉ふ猶又御坊の告訴のようを伺えあげて又知下知を求て打立べし。御坊も件の悪法師們を俱して共侶ふ出ぬべくとて昨宵ハ宿所ふ歇置れ心利ある雑兵四名と関宿千住の両路筋へ走らし遣しく庵主並ふ諸君子の往方を

索求めらるゝに這廢院に止宿のよし。天明て後に少しゑらべ小山主に従ふく轎子城いそがゝ。倶に這の門前に来て案内を乞ふ。拙僧さへに面伏るゝ。実に懺悔に為る。こゝ先に件の悪僧們を召て目にかけ。飯と喝食達那吊臺と幷寄せさせよとのたまふ。夫役們うち写て吊臺都て寄せ並べ。樹に裟袈を懸て。石地藏と駝に伏せて仰反り苦る。眞四訓を殺す佛いるかせとて。蓮臺をも吊臺に地獄の呵責も恁やと思ふ猶正に照据ゑ。鄙に大の星額に贈て。那經巻と五十金の財嚢と袱に裹て。這石地藏三尺の項に結ひ付て。大代四郎照文主僕八個の犬士も今ゆゝしき事。新に心地して是も亦我伏姫神の神変不測の妙智力もて懲させの神謀り欲と思よろこべるゝ。語り奴徳用堅削經稜素頼隊の僧俗もて同じ崇と身に摘く舌を振ひて並て皆驚て怕ゆ。奸虐破戒の先非を悔て思ひけり。

第百三十九回　忠僕死に事る靈佛の起本　孝子京を去る傳燈の法脈

登時又未得のゆゑ。這悪僧們を受る寛四訓を。人々面前に尺あるを。いまゞ知るまゝ所あり。抑その石地藏十體に曩に結城の家再興の折當君成朝主の志願を先亡義烈の諸大將忠死の士卒の菩提の為に建立せられ御佛是を始め這廢院を再興して居なるゝやとのたまへり。徳用が喫醋く思ひけん屡禀して掠めに遂にその義を停止せられて我寺に建立せるのひけり。今ゆゝ思ひ合るに這地藏菩薩十體倶忽然とかえるのざるとあらるゝ。どゝの者のあるかど。実事をくゝ思ひ果て恁る灵応あり。拙僧昨日中途にくゝ。その義と思ひ出るに。伴當と寺へかゝ。折那十體の石地藏尊を。尺そ来よとて遣せに十體をくゝ。是その御佛達に則是我寺の石地藏に疑ひ。就て又告まゝ。抑這廢院に結城の乃祖に所七郎

朝光主の建立なる。六道山能化院教主寺と唤做る。七堂伽藍の大刹なりしに嘉吉の兵火に焼亡れて。かの如くに荒果ぬ。當寺の本尊勝軍地藏菩薩は平將門の女児なりける。如藏尼の作るなり。我寺に迎執りたりく。秘佛として宝藏に在り。とらひて樹の下に立ちて。那德用は我徒弟なるに。德用が各位に俘囚ぬせらまく。這荒寺に奉れと思ふに量裏に囹守の這寺と再興の沙汰あらば時德用が遮りく。禁め稟ぬ悪報なく。那身と倶に同悪なる僧俗都て懲されけむ願ふに庵主然と云れて。かの御佛達に勸解と做しめつべ。千僧の萬部の讀經に弥優して。必納受ぬ。いくばくと老僧の慈悲の涙に顕まく。請求めて他事なをを、大法師を感嘆く。則未得に答るに。爰に肇てその廢院の来歴縁故と少知りく思ひ合まるとそ。鄙に拙僧那長老星額師に訪れ。折その在住の寺の名と能化院と狭少てるのと結城城下に寺院にそと猜して問も質さでに原来件の能化院いまの廢院のなりに化現ぬ。

ける。這十體の石地藏は逸正寺に置れぬと。能化院そと告られ。當初圉守の發願に。その地に建立做しまるらせんとあり。由縁と并ぶ隨に地藏菩薩の霊場なる基と示さるるに。然ばとそあれ那法名の星額は是地藏尊の額に。黒子ぬそ。俗に地藏星なべ。又その師父の法名と宝珠と。持せぬに麻る尼宝珠のようなると。今に座くに悟りあり。佛法廣大無邊無量の菩巧方便不可思議なるを。仰ぐべ信ぜべと。只管稱讃礼拜て。身と起て。吊臺なる十個の悪僧に向ひて。懺悔と薦め。業果と示さて。地藏經一卷と徐に讀誦まるるに。放免祈請の眼と閉合ぬ。悪僧は十念と授けて。破戒の罪障解脱ぬ。十體の石地藏は那身と離れぬ。苦患とおやぶるるに。尚起べもあらば。ければ朝重隨即夫役に下知て。地藏と倶に悪僧を載る。俱に吊臺と舁て。先城内に遣て折未得は那經巻と。五十金の来歴を肇て、大に守知て返しまるらせんとい

来るべし。大い決して諾いむ。後竟ふ逸正寺の什物ゆを做ふけ。然び再度の奇異ヨ心ふ。犬士們い餘談と惜まど。開ぐ中ふ信乃い亦語次ゆ未得おらゆ。前ゆ解示ゆ侍らる。那左右川ふ程遠くふ略傍小堂ある石地蔵の背ゆい建立の歳月をそ。嘉吉元年七月十四日。建立願主浄西と勒ーる。この浄西ハ法名ゆ。本貫那里の人氏ゆ。俗世王ふ欲と問へ未得い領に答て。その浄西のゆ。拙僧故ありて具ふ知れ。他い知れ石塔の先ふ君ゆ里見季基主の馬の鑣奴ゆそ十十八と。嘆れ者。身ゆ卑賤くて。数ゆ。その性い美ゆくて。人の及び忠心あれば。季基主戰歿の折ゆ。馬の邊と亀も離れ。その身も痛痍を負ゆ。敵ふ。ゆ知れ程主君自殺の亡骸と肩ふ引掛け命と免れ。近い山林ふ迹と埋め。當晩季基主の亡骸と。煙ふ做ーて。寄隊の大軍退去。後有一夜十十八ゆ。主君の骨壷と。紀の大刀と。甲冑と搭駝ゆ。我寺ふ潛来ゆ。情地ふ憑と。椿事ありと倡て。住持ふ對面と請ひふけ。その時逸正寺ハ我師の坊

住職ゆけれ。許ゆ。十十八を方丈ふ召入れて。隨即對面せられけ。當下十十八ゆ其身の素生箇様々々と首より鮮諦ーて。季基主戰死の折の光景と告知ると。半晌許。然而ふ。ゆと。ふと。烏滸ゆ。ふへと。小可已ゆ。情願ゆ。這主君の白骨と。這紀の両種と。悄地ふ御寺ふ執置て。莽ゆと。ふ。ーゆ。薄少ゆ。布施と。圓金三十両を献らむ。此ハ是主君季基朝臣鎧の脇鍔ふ藏め措れと。後ふ小可見ゆ。且小可を御弟子ふ做。祝髪得度の願ひと果さ。生涯貴寺ふ留ゆ。火打水汲と。常食ふ。大馬の力と盡ーべ。ーゆ。と。件の金と。薦めくゆと。麻ゆ。身と投伏ゆ。請求ゆ。他事ゆ。師の坊ふ。願感心ゆ。奴隷ゆ。ゆ。ゆ。志操ゆ。と思れ。結城氏滅亡ゆ。當時ハ事皆両管領の處分ふ依ざるゆ。ゆ。心ふ儘ーかーと。叮嚀ふ諭ゆ。祝髪ゆ。我ハ障ゆ。願ひの隨意ゆ。但ー那ゆ。龍城の諸大将の亡骸と。今我寺ふ葬ん。ゆ。憚ゆ。ふ。ゆ。ゆ。後難実ふ料ゆ。汝然ゆ。ふ思ゆ。その金ゆ。

この辺り當山より遠くもあらぬ武井左右川の頭なるあそ此の墓所を購求めて主の白骨を瘞め墓表を造り立て箇様々々ふ約せし汝の本意ふ稱ふせん是より外ふ術あらじといれて十八沈吟あそ暫く思ひ沒うけん貌を更め額を衝て仰羨りひ欣ぶ先祝髪友の願ひとそと亶もあそ幷ぶ俟止宿を允されて次の日本寺の御前ふて剃髪の義をめせられて法名を淨西と喚做され血脈度牒袈裟法衣一具を取せ給ひ十八の淨西ハ師恩を拜し畢て竟一両月逸足寺ふ在り竟ふ左右川の頭ふて一間四方の地を購求て季基主の白骨と紀の武器二種を悄地ふ埋葬て墓表の與ふとて一軀の石地藏菩薩を石工ふ課て造りなして細小る雨掩の御堂さへ建立まけ原那金弟ハ思ひの隨ふ宿願を果しそけり是より淨西ハ日毎ふ件の石地藏の御前ふ在て鉦を撞鳴らして朝より暮るまで念佛の聲間斷なけれ近村民往還の良賤相憐愍て錢を投與へ或ハ餅握飯などを取らもありけれ淨西ハ炊ねども饑ざるとを沒うけて

約束の一條ハ當時拙僧弱齢ふて師の坊の侍者なりけれ親しくそ聞ふ其の大略をなれ
ども然ば又件の淨西ハ上毛なる舊里ふ留置る妻ありて尚仏ふ獨子さへ孚類せ
けれども一ぢ佛門ふ入りしより浮世のなを思ひ捨て妻をも子をもろくもふ稀る風ふ便も
慰めもせで過る程ふ十稔許の光陰を歴てその子ハ年才十二ふなりける春母親病て身故
なりしかば馴ふ故郷ふ住不娯けん父を慕ひつ辛くもて尋て上毛より來ふけれ淨西驚
ハ厭しかるとも思へども尚総角なる者を追遣ん亦さまざまて留置んと欲ふ。
淨西ハ石地藏を建立の折より來て這廢院ハ地藏菩薩の旧跡なると思ふ故欲頽れ
殘る庫裏の背ふ最褊小る白屋を締構く夜ハ寢ぬと做せるのを子を類へるもあら
ざれば只得その子を逸足寺ふ招て見て有徒る奴の舊里より尋來ると爭何ハせん願
ハ頭を剃圓めて扱使れば幸ひ行んなの業をいりぐ方丈ハ冷えあげ給ねとのひ捨て回報を
なるぞ那身ハ年かつ去りぬ去のの後ふ冷えけり去の年の春先住ハ遷化て拙僧住持

るりけれバ那浄西ガ出家堅固の志操を豫ねて感じ思ひ久則他ガ所望の
隨意聽てその子ハ祝髪させて法名影西と唱ふ内典外典を讀学まるハ一と世て
二三を知るオの捷れるのミあるぞその性孝心深ろけれどその身のさうぐる一五飡と親の為ハ
半分ちく曉毎ハ疾起出て二里ハあまれる親の在処ハ赴き飯を餽りく天明ぬ程ハ寺ハ
還りて常の勤ハ就ると一日も懈怠なること一ガ初を人皆許りく云云と云ものこの実
やう益く發覚れて拙僧ハ人の告一ガ感心のあまりそ夜分影西を召寄て慥る孝行ありと
少ハ為ガ汝の饌を分ちて浄西ガ食料ハ日毎ハ取ることかど影西敢従ハ有
かゝるまで辱ハ仰ハ思へども然ハてハ親の心ハ悃ぐ慈悲甲斐のなきよろ只うちち
閑ハ思ひねと推辭く尚始のごく曉毎ハ餽ア為ガ拙僧ハよく感佩く他ガ飯の足ざ
ま餓ハやせと憐愍く只何とるく折ハ觸て果子餅を取らるハ并ちなれば持く
あれく必親ハ餽りけり左右する程その次の年の春の時候より浄西ハ風眼を病と

づひく久しくなるまで愈ざりけれバ影西只顧憂ひ歎く夜毎ハ水を浴て身濯をして
神ハ佛ハ願言して已ガ身をもて親の病着ハ代らんとのミ念ぜしかども竟ハその利益ハなくて
浄西ハ三目目ハなるハ影西ハ少くうち歎くよりと拙僧ハ告知て生涯親を看ることハ為ハ
身の暇を請ひガ拙僧ハ憐愍て小ガ浄西を寺へ召寄さて子舎を與へて親せん
慥る孝子とハ思て乞食ハ做さべきやとて連ハ林ハ尉めて影西泣く美引ガその
義ハ願ひ禀さんと豫思ひく幾番とるく親ハ萬ハ偽ハ只一ハ肋ハ氣質ハ信れバ然
あるハ心安ハ従べもひぞ猶ハの上のあん慈悲ハの身の暇を賜るべしとそ恩を謝て
別を告く飄然として出ぬあれけり影西暮裏ハ剃髪て當寺ハ在ること三稔ハ過ぎ年を
絶ハ十三なれども親の為ハ乞食して一毫も艱苦を戮ぐ始故郷ハ在りけ日他ガ母
親ハ仕へも慥ありけんと猜せる実ハ孝子ハ介程ハ影西ハ親と俱ハ那路傍小
堂なる石地藏の御前ハ在て往還の人ハ憐愍を乞て其を消ハ親の為を扶掖く

這里の白屋ゐかゝ者ろ。玄冬の寒けれ日ハ着る襤褸と悄地ゐ脱て親ゐ被て熟睡
するまで。身をゆくゑの脚を温め。又三伏の暑ハ宵ハ親の為ゐ終夜蚊を拂ひて睡る
と稀ゑ。徒而年来を歴る程ゐ。ある遠近ゐ物ゑ人ゐ知れて孝行小僧と喚做し
ハ。那路傍小堂の頭を過る男女ハ必錢を取せ東西を與て恩とせざ憐ざる者ゑろ
ハ。ひとゝ日毎ゐ親子の口を餬ゐのみゐあらぎして求めざれども其折々ゐ故衣ゑども沼易く
ゑろ。浄西ゑ明を失ひしより又六七年の光陰を送りて寛正の初の年間浄西ハ豫より死
期を知りて影西ゐあろゑさつ送言ゐけるゐ果しそその日ゐゑりければ病苦もあらぬ端然と
合掌十念の聲の中ゐ睡を居ゐ像く息絶けり。影西哀慕悲泣ゐ堪ざ然而あるべきゐあ
らざれば則父の送言ゐ従ひ。那路傍小堂ゑ右地藏その側ゐ安葬て。松を栽て標と
ゐ。敢墓碑を建立せざゐも父の志ゑれば。ゑるまを偽ゐ遠近人その柩を送る者幾百
幾千ゑると知らぎ。ゑれゑ與ゐ茶を賣り。餅糕米を粥ゐ糴ぐ經紀さゐその四下ゐ出ゝとぞ。あの

ゐ逸足寺へ行ゑ。拙僧則浄西ゑ為ゐ衆徒を聚合て三个日の讀經を修行。
且前約の如く影西を寺へ召執んと欲ゑゐ。他いまゞ従ゐ。親の在り一日のゑ日毎ゐ右
地藏の御前ゐ跂坐て鉦を鳴ゝて念佛を唱るゑ甘春月ゐて既ゐ親の服闋ゐ逸
足寺ゐかゝ来て恩を謝して学寮ゐ在り是より影西ハ夜ゐ日ゐ佛学を研究して
又五七年を歴ゐければ本山屬院の衆徒ハさゝゑ約莫下總一圖ゐ他ゑ右ゐ出ゐ者ゐ
ゆく拙僧ハ寺職を影西ゐ讓りて退隱せまく思ひゐ徳用ハ師兄ゆく。且結城の家再
興の折京都の管領へ俗縁の義をゆて。提撕禀ゑ一功ゐ是ゐ加るゐ城内多く重職
堅名長城根生野るゝど年来徳用と方外酒飯の友ヌゑれば後住の一説ハ左ゐ右ゐ
拙僧の意ゐ儘せぎ只得寺職を徳用ゐ讓渡ゑ一ゐ心術正あゑ檀方是非ゐ明
るゝ同学の法師ハ俱ゐ不平の心ゐ徳用ゑれを鬱悒く思ひて遂ゐ事を假托てその
法師ハを追出し。剰悄地ゐ影西を毒殺せまく欲ゑ一と影西を毒氣色ゐ猜ゝく。

文溪堂藏

辭し去て京師に赴く更に八宗を兼学まそらく智識の学をあらそとも。某の法親王の執事にせられて。權僧正に成登り既にその高貴きを拙僧などが今ゆゑに企及ぶべくもあらねども。今番の異変を告知しそ後住の義を憑み。影西本性孝順なり。永く勢利を愛せざるべく。今の顕職を辭し禀し。必這地にかへりきて。我寺の法燈を紹ぐべし。有恁る美談にはべり。那浄西のなんとも問れてその子孫上ちぐも。詳にせざるとを汲び。主客地上に坐しぞ。思ひ遣せ長談にさぞ傷痛うも。饒しのとうち陪話れば。八個の犬士、大代四郎照文主僕に至るまで。俱に感嘆の聲を合して。奇也々々と稱ずに開が中に信乃が。原来那浄西は始我思ひ。ぞ。里見に由縁あるを。親子罪ある忠孝を。守けばらめくるっけれ。然る忠僕の剃髪して亡君の菩提の為に建立ける石地藏るべく。那衰老法師に化現して。我毎に忠告の利益は俗に云縁ある衆生を度さるの義にあらざる因て。今亦思惟るに那路傍小堂なる石地藏の面部に缺る処あ

はゝ件の願。主浄西が明の失るに類りのみ狹。その側に栽て。一樹の松を。浄西の墓表るうんとのみまぞ知るよう。ゆるゆるしぶ廻向せば。一悔さよとのべ毛野も亦ら。御国紀二六が白屋にて。死と告る一個の法師は眼を閉柱に凭れて。喚べども応せざるとのみを思へば開ら浄西の在りし形貌を顕し示す。亡魂にのやあらけんかとのべ親五衛黙頭て。小ばば咱仰ら中途にて。庵主の急難恁らと告知しける那法師も亦浄西の灵魂狹とは思へども其法師の齢二十あまり。色白くして。開を浄西に思ひ方れば。三十許も弱かるべし。年齢相応しかざれば那灵魂にあらずして。是も亦伏姫神の神変不測の灵応狹そまちあら。智力をもて。目今量り知るべくば。是なるの奇異を後に至りて。思ひ合るのやあらんとのべ莊仗大角現八小文吾道節照文代四郎。孰か正可に思ひ沿べ。俱に感る朝重八人の噂に。知る浄西親子の忠孝に猶も新奇の灵佛利益を。今ゆゑに又嘆唱まそ時の移るを知らざるに。當下、大い未得に向ひて。聆新なる浄西親子の忠孝の美談に就て。

文溪堂藏

告まゐらせ奇事あり。倘京師なる影西僧正が師父の招延を兼容れてかへり
来る日もあらば言傳てゆこねかし。その故い箇様〻〻と那星額の齎しこの本寺基主の白
骨と狙公の刀の事を。詳に解示まゐらせ初拙僧結城に来て庵を締び比ろ〻我先
君の墳墓の有や無やと思ひ難て人に問ひ索ねかども竟に知るこをえず憶るもあ
らざる白骨と紀の大刀を沼そけるに開も亦南柯の夢に似たり。その白骨と名刀の出る処を今ぞ
知る。佛の利益のべがたし。浄西法師の賜めて。その墓表の石地藏の化現の霊異をもて
るべし齎しゆくに別佛也。曩に圉守の建立と等く地藏菩薩の化現にあるべき事
語るに似れども萬佛原是一佛なり。地藏菩薩に両箇あるとは。壁言び田毋に穆る月の
影幾ばくもなくとも真の月をうち仰げば只一輪なるが如し。その理とりく推きたれば逸足寺と
路傍小堂と自他十一箇の地藏尊利益に則一灵佛也。今はうち分別きべくぞ我先
君の白骨と紀の大刀に土中なる。安房に赴くとも。倘一種の紀の鎧永くその地に送

墳墓空しくなるべき。後に古迹とする時は。那僧正に對面まして是等のよしを云云と告
るべきぞ。教えたその秋びと面前にのぞで過ぎ送憾しさよその意を彼のこれかと憑めべ
き未得も朝重も又這奇談に駭嘆しく。醉るがごとく醒るがごとく只共侶に感服まゐらせ
ましとのこと稱えり。姑且しく未得に亦、大と八犬士に談まゐらせ那白骨の一條も亦是奇
中の一大奇事也。庵主の佛意に稱ひぬる。德の高紀を知るに足まり。就て德用堅削
們及堅名根生野不良の僧俗都て俘囚にせられども前にも既に陪話ひぬ。他們を
一個もあり身方に減殺ども員しに沼ざるに罪饒さるべきやいなむ。但那長城惴利の殺
害の罪免れざりけれども那身に村長剛九郎が為に首を喪ひ。これが自業自得とこそ。
伏て願ふ那僧俗。放ちぬべ幸ひなるかと勸解れば、大に點頭て。そは亦愚意も相
同し。八士の意見いまだ少ねども拙僧年来の志願を果さ。念佛供類の作善を忘
れて執念深人を怨んや。とうひつ倘とをへて各その義を何とぞ思ふと問へば道節先

答て我们他郷の旅客ゆえ。權勢もなく。羽翼もなければ。賞罰の訓は國守の隨ゆえ。敢恣ふせんとふあらば。倘結城殿良將なれども。その家臣と封邑の法師们を見省みるゆえ自他の邪正を糾さとなく。討隊の士卒を差向られるば。我们只得及ふ釁なりて人をも殺し身を殺さんふ幸ひふして。穏當なる家臣を使節とし。事の仔細を問れふ。照据既ふ分明ゆえ。我们ふ罪なきよりと。詳ふ知られるば。実ふ意外の造化。大江が意見ハ。いかゝぞ。向ふを親兵衛ゆあべぞ。そゝ勿論のなんか。那惴利ハ他人の為ふ殺されて命を隕しうとく。我怨さへ解るべ。そゝ唐山の鄙語ふ張公酒を喫ぬ。まで本子ハ。ふ酔ふとふ。ふ狗骨折く。鷹ふ捉られ。怒と移さば不狂人も倶ふ是走る。犬阪大田犬川ふ別説なくハ却已るん宜く計ひあくと云親兵衛かくの如くなれば。誰ゝ亦異説ゆ。皆共侶ふ朝重ふ。うち向て目今の説を守めゝ。狡國守賢明の憲断ふよりて。我们ふ罪なきよりと知られ。こゝまゝ。いるゝ面目欺び何事ゝ是ふ優ゆべ。但一生擒の僧俗を那侭遮蔽し。

ゆらせるば。守ふ賞罰訓るふ似て。非礼ふ。そひるゆ。解饒ゆべくゆ。とふを朝重ゆ。其義ハ決して厭ゝ。他们ハ都て罪人。然ば各の拠る索ハ我君命を奉りて拠る索ふ異なゝ。那侭ふ。ゆ退るべ。主君かゝ。那霊佛の一々ゝ利益のよりと。ゆとふ。庵主ふも各位ゆも。對面せまく欲ゝ。かるべく。恁る名僧良臣。ヨヌく沿ゆひゝ。ふ里見殿の武德を羨ゝく思れん。權且結城へ立かるゝ。逗留ゆば幸ひゝ。とふを大士ハ諾るゆ。そハ辱くゆへども。庵主ハ先君の白骨を駝なりゆへハ。只管去向をハそゝ。ゆべく我们ハ故ありて大江親兵衛と除くの外ハ。まゝ主君ふ見参せゝ。這回ゆ。ふ時至りて。八人送ゆ相伴て安房へ赴く旅なれば。不本意なゝ。結城へかゝて。賢君親疎ふ私なゝ。憲断の欺びと稟ゝとゝ。ゆざるゝ。その義宜く執達の芳情と仰ぐのゝと。一個々々ふ語と續く。異口同様ふ辞ゝ。大照文代四郎さへ留るべくもあるゝざれば。朝重有製ふ強ゝゆゝ。切く諸川の酒樓ゆて。留別の酒杯を薦めゆ。ほく思へども。私の面會なゝ。君命の使价ふく

且ひとヨクの罪人を牽めて退るべ愚意ふ儘せを卒介ふてそとうち陪話れを大士も
亦慇懃ふいとぎかり然る義あらん苟且るぐう主客の礼あり先立めといそぐせ朝重隨
即外面る暇兵们を召入れて経稜素頼徳用们の僧俗如干の罪人の赤と合
あり牽立さるく且門外ふ遣るく然而未得と共侶ふ、大八犬照文们ふ告別ふ身と
起して角門より出て出げ出る設る伴當们ぐ馬を牽向け轎子と抬げ寄せ相迎へて
倶して結城へ還りけり。尓程ふ八犬士ハ、大照文代四郎と共侶ふ日は首尾と歓びて
一霊時庫裏ふ退るく。身甲臂縛蹤繳の武具を脱ぎて庸常る逆旅ふ衣裳
食領ひ暇兵伴當と従へく。諸川のくふ急ぐ程ふ長ぐ日られ然るふ時ハ移らぐ
去向の村ふ午の貝吹く時候るけり。話分両頭然ぐ又小山朝重ハ途ゆく未得ふ相
別まく結城の城ふくとあり隨即主君成朝ふヨ火佛の奇異、大士の武勇、大照文代
四郎们ぐ答禀ふ一事の趣及経稜素頼徳用堅削们僧俗十数名の罪人を

受含るく。牽ふて帰城の終まで。詳ふ次えあげ成朝主又ハ敬驚ひて、大の道
徳大士の智勇と賞感特ふ浅くぐ往古より霊佛の利益とふのヨクれも然まで
正ふ霊異ハるく我も結縁の為られぐその念佛の行者、大と八個の勇士ふ對面
あく意表と示もべくふ悔ふかりとくふ不娯て今ハく捨くふ思ふあり是ふより経稜
素頼们の非義非法の罪と糾ふく賞罰ハ公るもあぐ必や隣國の諸侯の為ふ悔
られんとく更ふ朝重ふ課く件の罪人们を堅ふく獄舎ふ繋ぎて拷問數回ふ及びぐ経
稜素頼徳用堅削们ハ今番の奸詐暴虐と具ふ招るのまぐ年来驕恣
ゆく上を憚らぬ下と虐げるるまでも這時都て發覚れけり。あれども経稜素頼们の親
嘉吉ふ忠死の舊功あり又徳用ハ當家再興の折京都の管領家へ提撕あるもあれば
倶ふ死罪一ぐと宥めく経稜素頼ハ所親ふ預け置れ徳用堅削並ふ同悪の僧俗ハ
或ハ法衣と剃捉られ或ハ背を鞭まく倶ふ追放せまけるこの日逸足寺の先住未得を

召よせて徳用們い恁々の罪あれば追放せらるべしと言示され後住いその器に當るべき学徒の老実なるを擇び入院せしむべしと命せらるるこの議断の一條は朝重憲裁として有司と俱に主君の旨を伺ひ奉る像のごとくに行ひけり小程に経稜素頼は絶へる獄舎の呵責に饒され所親の家に閉籠られて放免の日を待けるに其の六月の時候に熟病に犯されて俱に黄泉の客となりけり小るに経稜素頼及惣利の各髫歳なる男子あり其の母親に推られて外祖の家に類るよりなほ成朝則件の経稜素頼惣利が児子二名を召出し親の本領の半分を賜りて堅名長城根生野の絶さる家を嗣しめ成朝かくの如く公平ゆく賞罰正しくければ諸臣畏服して乱臣賊子なく忠臣賢才用ひられて這家長く治る天正の年間晴朝の世に至るまで舊家連綿の大諸侯となりぬ世の人の知る所之間話休題却説逸正寺の未得へ徳用堅削が追放せらるるこの年使僧を京師に遣して故の徒弟なりける那僧正影西に

徳用堅削們い犯せる殺伐の罪に依り追放せられ諸檀離れんとも御坊始を忘れぎるく鳴雁北に帰くの意あり此で僧綱の顕職を惜まるべしと我寺に来て法燈を紹ぎ一草の亟るべきを早天の雨の如くそのうせける影西の消息を聞く感涙の袂を覚ぞ倘今顕職の勢利を捨て師の招きに應ぜざい這世に牛車の栄あるも来世に必地獄に墮ちる苦患を速やかべしと先その使僧を結城へ還しく某の院の法親王に陳情の啓をしたまひ且病着に托着て連りに職事を辭ひ禀まるに法の竹園直ければその孝順を感し思召さるる願ひのまに〳〵下總へ還ることを允しゆるされの年の冬の時候影西に結城へ逆正寺に帰て師父未得に對面せしめ迭に再會の歓び大なるべし躰て囲守に対へ上げて影西逸正寺に住持に做りしより遠近の良賤渇仰を敬ふ冒隣囲に類なりける又那十體の石地蔵と又那路傍小堂なる地蔵菩薩の利益霊異を伝ふる者参詣日毎に間断る

く両所の賽錢夕々ふ算をのく料らひるとるとも皆逸足寺へ収納まれば財用餘りあるのみ〻影西儉素ふして衆徒を教育の暇ある毎ふ徒弟四五名を招き〻みづから錫を突鳴らして城下の町近郊の邨里を巡て衆生ふ薦る托鉢ゑれい賢も不肖も皆その信あるその捨の寡紀を恥とせり有低り一程ふ先住未得の遷化をそ三周の忌ふ丁る年までふ逸足寺ふ聚合たり一金を慮二三萬兩ふる及影西の豫より那六道山能化院を再興の志願あり開ゲ為ふ貯こ所の財用をもこ他事ふ使ふぎようと囲守ふ懇く免許を經て土木の工を興まらび成朝主欽びく則數千金を捨てくその經営と幇助のみの且能化院の坊料を舊の如く寄附せる然ば結城武井諸川の士農工商招ざるふ聚ひ来く土を運び木石の車を推を者日毎ふ幾百名ゑると知ぎ約莫二稔許ふして七堂伽藍迄もく奇麗壮觀目を驚ふ都く落成まらけるとるく影西長老い那勝軍地藏菩薩を逸足寺の宝藏ろ

ゆ出しなるて昔の如く能化院の本堂ふ居なり又その本堂の西のくふ地藏堂を造営まて那十體の石地藏をも逸足寺より件の堂ふ移しまるせ又那左右川の邊多略備ざる小堂とりと廣安ふ造更めてその四下ゑる荘客の田圃を價宜く購合りて香華料と

まて守堂の老僧を置行り況又能化院ふ学寮を建て衆徒を教育し量の徳用ふ追遣られる良善正直の法師們を召選て諸役僧ふ做ければ囲守成朝主その大功を

誉て影西前權僧正と能化院中興の祖と仰ぐべ逸足寺の住持をも兼帯を

まと命せ〻ふ原是逸足寺い能化院教主寺の屬院ゑり一ふ本山荒廢ゑる以来その子院屬院つまく逸足寺ふ屬従ひと今番又改めて都て能化院ふ隷ひられけり影西既ふ功成り一ふ法教の暇安房へ赴く里見殿ふ見参まなり且〻大庵主八犬士も對面せまくほしとて囲守の上旨と伺ふ成朝主欽びく我も亦古折をりく舊交を復結んとて躬て小山朝重と影西長老と使とて種々の土宜と齎て安房へ遣りあけり低而影

西長老ハ朝重と共侶ふヨヲく伴當となる。稲村の城ふ来着しつ。犬士ふ就て義成主ふ見
参し、大照文代四郎ふも對面して両國守の舊交新約障りなく敷程ふ義成主六
影西の孝順なる父淨西の孤忠ふよりて先大父義烈院の白骨改葬の欵びと叮寧ふ宣て
日毎の御食饌大ゝ多し。影西ハ逗留の間出家ゑれば許されて犬山寺の不動洲崎の品山崖
那古富山の両觀音伏姫の靈迹義烈院殿の廟墓へも参詣の本意と遂て罷
去んとする前日ふ義成主ハ影西朝重ふ東西を賜ふと勘りぎ更ふ亦、大法師と矢江親
兵衛蜑崎照文を答礼の使として國産と三所の地藏菩薩へ寄進の東西をさゝヲく
夫役ふ幷せ従ハて影西朝重と俱ふ結城へ遣して両國和順拡言約の礼ふ答ゑる老成
朝主ふ敬びて、大親兵衛照文ふ饗応山河の珍味と盡して且ヲく牽出物を賜ふて
安房へ還されける是よりて後里見結城の両家長く脣齒の國と盟て相犯まとるなけ。這
折親兵衛ハ、大照文と俱ふ那路傍堂なる石地藏季基主の鎧塚淨西法師の墳

墓ふ詣けるかへさふ又能化院ふ立よりて十體の石地藏菩薩を拜てなり。又本堂なる勝軍地
藏菩薩ふ焼香の折這本尊をたらくとそなるふ曩ふ諸川の那方ゑ、大法師と代四
郎照文主僕の急難と忠告ける那法師の面影ふよく肖れば訝りなる度よく相ふ
件の法師ハ額の直中より聊左ふよりそなる大ゝなる黒子あり。と記憶なるふ這本尊の地藏菩
薩の額の中央ゑ。此一左へよりくれば原来那折の忠告法師ハ這本尊の化現なるけりと肇て
悟て且感心のあまりよりと照文ふ悄語ば照文も亦心つ死て咱們も曩ふ代香使こゝ一折、大
庵と尋ゆ。ふ案内をなる那法師の相貌もゑの本なるふ似るけの甲も乙も這御佛の化現の
利益なりけると今ハ十あまりの年と歴て肇て倶ふ悟り死とゝを、大もち所て人の發明遅速
あれども佛の利益ハ始より違ずと感ずけ。偖而、大親兵衛照文ハ俱ふ客殿ふ請待せ
られて先知客の役僧ふ里見殿の故らふ三所十二箇の地藏菩薩へ寄進なる三箇の銀の
大香爐と幾唐櫃ふ藏める一切經を遞與ふ。ければ住持影西ハ對面して茶と看め果

子を薦め。然而里見殿の寄進の大々きるゝ奴秋びと舒ゞ七一切經い年来欲しく思ひ侍りしかども。僻る田舎迚て輒くゆるさければ果さでやゝ今番賜りしに。宋板元ぞ実ふ千金の至宝。昔年庵主の逆足寺へ遣しぬ。二種十數軸の經と共ふ今よる室藏へ秘置て永く法孫ふ傳へむとぞ。怡悦の眉を開れる。ゝ後、大と法問あり。又齋を薦めらる程ふ日景既ふ傾紀れべ、大親兵衛照文ハ能化院を立去て伴當夫役を従へ〻一宿して次の日ふ又関宿より舩ふ乗て又その次の日ふ稲村の城へかゝる。俱ふ義成主ふ見参して返命を稟けり。ゝの比義成主ハ照文を召よせて結城の光景を問ゝ。ゝ照文ハ那能化院の本尊ゝ勝軍地藏菩薩の昔あり。利益霊異を今番親兵衛と俱ふ啓て悟りしとゝ。出てゝの故ハ箇様〻〻と具裏ふ親兵衛ふ、大のゝ忌難を告知せし。法師のゝと照文ふ、大庵を案内せる法師のゝを解ふ。前後約束の違ざりけ。霊佛奇妙の応験ゝ。ゝ管稱賛せり。義成主點頭て开いと奇しゝ。約莫霊

佛の利益ゝ。者。和漢ふ例尠ゝれど。本石十二體の地藏菩薩俱ふ化現の霊異ゝ。前未聞の利益。ゝれども。是を地藏の化現ゝ思ひ惑ふの醒ざる何ゝ。ゝれ石ゝ。刻ゝ木ゝ作りし佛像ゝ。ゝ木佛ゝ。ゝ做ゝ。ゝ事ゝ。ゝ壁言ハ那傀儡師ゝ。ゝ木偶ゝ。ゝ像ゝ。ゝ神物ゝ。ゝ別ふ神物ゝ。ゝ佛像ゝ。ゝ霊異ふ。ゝ道理ゝ。ゝ石像木像ゝ。ゝ地藏菩薩ゝ。ゝ未然ゝ。ゝ禍福ゝ。ゝ動。ゝ脚ゝ。ゝ運。ゝ言。ゝ聞ゝ。ゝ者ゝ。ゝ熟ゝ。ゝ實ゝ。ゝ事ゝ。ゝ故ふ聖人ハ怪力乱神を語ゝ。ゝ都て神異ゝ。ゝ心ゝ。ゝ人ふ福ゝ。ゝ世俗ゝ。ゝ霊驗利益ゝ。ゝ稱ゝ。ゝ神異霊應ゝ。ゝ人ふ禍ゝ。ゝ世俗ゝ。ゝ妖怪ゝ。ゝ有徒ゝ。ゝ魔佛同根ゝ。ゝ相距ゝ。ゝ遠ゝ。ゝ誰ゝ。ゝ因ゝ。ゝ知ゝ。ゝ覺知ゝ。ゝ然ハ神佛ゝ。ゝ霊驗利益ゝ。ゝ惑ふ思ひ定めゝ。ゝ口ハその實福の我ふ及べるを。ゝ仰ゝ。ゝ達者ゝ。ゝ用意ゝ。ゝ人ゝ。ゝ裏ふ。ゝ我ハ。ゝ意ゝ。ゝ惑ふ思ひ。ゝれども。實福ゝ。ゝ旅ゝ。ゝ最叮寧ふ諭しぬ。照文深く感服

老、宜ふ沼々氏御教諭をもて。世明の醉ハ醒ぬ。昔年毛野が論をも。現れ出ぬ。相似たる御論いとゆ
精細を解しとあれば。おろ〳〵易る。因て思惟れば中庸ふ國家將ふ興らんとまれば。禎祥あり。國家
將ふ亡んとまれば。妖孽すあり。といへり。則魔佛同根。霊驗利益と。妖怪変化と。禍福の同かゞ
るハ只その人ふあるのみ。曉得るも皆是御高論の御賜。そと只管ふ稱ゑ。狼の出るもいと後の話な
れども。淨西影西父子忠孝。小海氏烏とまふ結んそ。文添るもかゝの如し。看官前後を相照して是より下い
廢院の果の段ふ復〻見るべし。間話休題。再説八犬士、大代四郎照文主僕ハ當日朝重と来得を
目送りて。躍て荒院を立出ぬ。諸川の驛を過る程既ふ亭午なり。大家書餉を喫べんと欲するふ
驛稍盡処なる飯店ふ宿を揭ぎて酒と飯を賣るれ。ふて立寄ふ這店と高所ふ奥ゆ
坐席あり。大八犬士照文代四郎ハ俱ふ奥なる孤屏の蔭ふ坐して。蔬菜の餌を設て野兵伴
當一樣ふ各昼飯を果しけり。畢竟八犬士們這里ふ憩て後の話説甚麼を開ハ下回ふ解分ると聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十終